

なんか赤いポーションできた……

みかんお

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

王都の安宿の一室に住む、つま先から頭のてっぺんまで平凡な田舎娘。それが私リザリア（苗字は恥ずかしいので略）師匠が死ぬまでは、それなりの生活をしていたけど師匠が死んでお店をクビにされてもう大変っ！なのに商道具のポーションまで……一体これからどうしろって言うのよあんちきしょーーーつ！！

という、探しばどつかにありそうなオバロ二次創作です。あらすじでわかると思いますが、私の文章力は低いです（笑）ただオバロ総集編のわお祝いと、アニメ二期のお祝いに書こうと思つただけです。よろしくお願ひします。

目
次

青いはずのポーション……
女子力低いはずの幼馴染……
兄弟子は嫌な奴なはず……

9 4 1

青いはずのポーション……

師匠に弟子入りして十年。

帝国に居を構えて三年。

全然儲からないし、冒険者もしながら何とか日銭を稼いで生きている。いつになつたら自分のお店が持てるのか……師匠のお店は兄弟子が継いだ瞬間クビにされたし、何とか一月に10本買い取ってくれるけど安値で叩かれるし、嫌なことつて続くもんだよね。

リイジー・バレアレさんレベルの有名薬師になりたくて薬師をはじめたけど、最近私の作るポーションが変になつた。

最初は魔物の血混ざつちやつたのかな?と思つたんだけど、10本作つて全部が真っ赤なポーションになつた時点で絶対変だと悟つた。でもこんなこと知られたら薬師として生きていけないし、元のポーションを作ろうと頑張つても何故か赤くなる。

呪いかと思つて教会にも行つたけど、掛かつてないつて言われたどころか頭の心配までされる始末。

仕方ないから薬師は諦めて冒険者業に専念することにした。

勘違いされることもあるけど、冒険者の仕事は何もモンスター討伐だけじゃない。

荷物の積み下ろしや、御者、掃除、洗濯、武器の手入れ……街中でやれる仕事も沢山あるのだ。危険度が少ないので、人気!!と言うこともなく。というかどちらかと言えば不人気すぎてギルド側が指名依頼にする案件もあるくらい。

まあ早く階級上げたい人はポイントの高いモンスター討伐するし、安い雑用なんかやりたく無いつてのが人間の心情。

私は結構好きなんだけどなあ……掃除行つた先で美味しいご飯とか食べさせてもらえることもあるし、一石二鳥じゃない?

でもそんな雑用で食べていいときはちゃんと討伐に行く。ポーションなら腐るほどあるし、怪我をしても目的の数に達するまで強行することができる。

……自慢できることじやないし、私、すごく弱いから誰もパーティには誘つてくれないけどね。

薬師つて言えば迎えてくれるかもだけど、ポーション作成費で揉めて斬り殺された先輩の話を聞いて信頼できる人以外には、誰にも言わないと誓つた。

赤いポーションを作つてから気づいたことがある。

まずは腐らないし劣化しない。

これは便利だしすごいことだと思う。歴史的発見な気がするけど、私が作れる程度のポーションだ。きっとリイジーさんとかは普通に作れるんだろう。

師匠は中の下程度に評判の薬師だつたから知らなかつたんだろう。

となると私は師匠を超えたわけか!凄いぞ私!偉い!

で?どうすんの?

こんな胡散くさい薬売れる?

冷やかしに買つてくれるかもだけど、絶対それ罰ゲーム用とかにされるよね?イロモノだよね?

…とりあえず一本飲んでみるか。

ナイフを滑らせ指先を切り飲んでみた。

味普通。傷治る速度は多少、早いくらい?でも赤い。なんじやこの
ポーションは?訳分からん。

まあ色の違うポーションなんて見たことないから、私がお店やると
きの看板商品にしてもいいかもしだい。といふかこれしか作れな
い。

女子力低いはずの幼馴染……

昨日の今日で所持金が5銀貨を切つた。

そろそろ本格的な狩りに出ないとやばい。

何かいいクエストはないか……早朝からギルドに入り浸り目を皿にして耳をそばだて”イイハナシ”がないか息を潜める。なあに、私は話しかけてくる奴なんか居ないから簡単よ！

このまま結婚出来ずに終わるんだろうなあ私の人生。悲しみかない。ポーション変だし、昔から中々レベルが上がらないんだよなあ。優しい変わり者の師匠も見放すレベル。最悪である。

「あんた！生きてたんだ!!」

背後から悪友おさななじみの声がして嫌々振り返った私は心臓が跳ねるのを必死に笑顔で隠すハメになつた。

「…………ちょっとブリタさん？そのお隣にいらっしゃるイケメンはどうなたですか？」

何故なら彼女の横にはめつたにお目にかかるレベルのバリバリタイプの男性が立つていたから。

「何その喋り方…まあいいや。こちらペテル。コレはいつ!?」

「初めましてペテル様。私、リザリアと申します。是非ともリアと呼んでくださいませ！駆け出しの薬師ですわ!!」

「う、うん。よろしくお願ひします！」

私の中の私が『ゲット！ゲット！』と叫んでいる。

分かっているが落ち着け。大丈夫まだがつづいてない。

ブリタとは久々に会うということでお茶会をする……この時遠まわしにお金が無いことを言えばブリタが、あのケチで小者として有名なブリタが！？

奢つてくれると言う。

途端に『僕に格好つけさせてくださいよ、ブリタ』なんて目を細めたペテル様まじイケメン。ただ私の名前呼んでもいいんだよつ！？！ハアハア。

…………ふう。やはりイケメンがいると紅茶もいつもの倍美味しく感じる。

「ブリタ階級上がつたの？凄いじゃない」

「えへへ……って言つても棚ぼたみたいなもんなんだよねー」

イケメンはニコニコと私たちの話を聞いている。

自分の事ばかり話す粗野で野蛮なほかの冒険者とは違う。やっぱりこの人しかいない。

ペテル様！君に決めたつ!!

ごめんブリタ。話聞いてなかつた。

「でさでさ、あんた一応薬師じやん？」

「一応とかやめて下さいます？」

「だから何でそんなに喋り方？いつもならやがれとか、あんちきしょーと「ブリタさんが何歳まで粗相をしていたのか、ペテル様知りたくありません？」ごめんっ！もう言わないからやめてーーーっ！」

「で？薬師が何ですか？」言つておきますが友達割引はしておりませんわよ？」

怪訝そうな私に、ふつふつふつと不気味に笑うブリタ。椅子を少し引いた。

「じゃじゃあーーん！」

さあ取り出したるは人間が作つたとは思えないほど緻密なデザインの瓶に入った真つ赤な液体。

何故だろうか。それを見た瞬間心臓が止まつた。

「全然驚かないね？リイジーさんに見せた時は大層驚いていたのに……あつそーか！伝説の赤いポーションなんて知らないんだ？あんたの師匠胡散臭かつたものね」

「師匠の悪口は言つてもいいけど、私の知識が足りないのを馬鹿にするのは許さないわよ？」

「ドヤ顔キメてるところ悪いけど……普通逆だよね？」

あれ。動搖しているのか本音が出てしまつた。
すみません師匠。

一応あの世の師匠に謝つておいた。多分あの師匠のことだから『謝るなら罵つて欲しいのお』って言う……あのエロジジイもう一回死ね。

「それはリイジー様が作られたものなの？流石は世界一の薬師ね」「違うよ！エ・ランテルの大英雄、モモン様に頂いたのさ！！」「……ペテル様。この子、ついに、頭が？」

「いえ。それは間違いなくモモンさんにブリタが頂いた物ですよ」「ほら、さつき話した棚ぼたの件」

ブリタの妄想ではないだと?

昔から英雄の本ばかり読みすぎて、二言目には英雄になる!と家を飛び出して冒険者になんかなつたブリタが?本当に大英雄とお知り合い?

棚ぼたの件はマジで聞いてなかつた。今は反省している。

しかしこの赤いポーションが、伝説のものだとすると私みたいなポーションが赤くなつてしまつた人が他にもいるということ?
……それとも、失つても惜しくない程その人にとっての価値は低いという事?

モモンという英雄が少し、怖く感じた。これ以上考えてはいけない気がする。

「そ、それでねつ。もう一つ大事な話があるんだけど…」

うん?珍しくブリタが女々しい。鳥の足の丸焼きを切り分けず噛みちぎつた女が、頬を染め身体を揺らしている。

「ブリタ。私たち友達でしょ?例え大人になつてからも粗相をしてしまつたとかであ「違うよつ!!このバカツ!!」

馬鹿じやないし。

私が折角優しくブリタを励まそうとしたのに…

「あーもう……つ。いいかい?驚かないで聞いてよ?」

「滅多なことでは驚きませんわ」

「私結婚した!!」

ふあつ
!?!?!?

「だ、誰と……」

「こ、この人

ふああああああああああ
ペテル様あああああああ
ふああああああああああ
ああああああああああ
!あ!!!?!あ
ん つ
!?!!?!!??!!?!!?!

兄弟子は嫌な奴なはず……

昨日まですっかり忘れていたけれど、今日は兄弟子のお店にポーションを卸しに行く日である。

何も対策がないまま兄弟子の店——いや正確にはお師匠様のお店であつて兄弟子は別に後継者認定されてないのに乗つ取つて私の事を追い出したクソ野郎だから。いくら国一番の薬屋に地位に押し上げたとか言われてても、可愛い妹弟子のポーション買い叩くようなゴミ野郎だから。決して兄弟子の店とは認めないお——にたどり着いてしまった。

「おお。リザリア～今月も来たのか？最近どうだ？儲かつてるか？」
（略）お前程度の薬師売れるわけねえだろ。買ってやつてる俺様に感謝しろ。

「あら。メイソン～今日もカウンターにいるの？研究は進んだのかしら？」

（略）お前だつて似たようなもんだろ。引きこもつてポーション作つてろ。

ん？にこやかに会話していますが、何か問題が？

猫かぶりは師匠譲りですよね私達。

目と目で『ぶつ殺すぞ』と語り合いながら、何時ものようにカウンターの奥に向かう。

ヒソヒソと、私を妬む声が聞こえるけれど、こんなカスでいいのならお金を払うから一生私の目につかないところに閉じ込めておいてもらえると嬉しいな。

速足で誰もいない店の裏に行くと途端に前から聞こえる舌打ち。
お返しに私も床に唾を吐く。

「表から入んなつて何回言えれば理解するんだ？脳味噌空っぽか？」

「先月、裏で4時間待たされたの忘れてないわよ。さつたと済ませましょ? いつまでもこんな腐った顔の男のいる空間に居たくないの」「ふんつ。さつさと出せ」

一瞬袋の紐を解こうとして頭が冷えた。
やばい。赤いのしかない。

固まる私からイラついたように袋を取り上げ中身を見たメイソン
が固まる。

「ブツ
「え?」

口元を押さえ爆笑する兄弟子に眉を寄せる。

おかしい。兄のことだから既に伝説のポーションのことは知つて
いるだろう。

だからあるだけ出せ、と脅されるか偽物と疑われ冷たい目で無視す
るかの二択だと思ったのに… :

「ああく久しづりだぜ……こんなに怒ったのはよおおおおおー!!」
「ぎやあああつ!! 1個1銀貨の薬瓶があああああつ!!!!」

袋を地面に叩きつけられ踏みつけられる。

酷い。酷すぎる。乙女のあれやそれらを切り詰めて買った瓶だつ
たのにつ!!

「何すんの!ぶつ殺されたいのつ!」

「殺してえのは俺様の方だ!こつちは陛下からの無茶振りのせいで毎
日毎日家にも帰れてねえのに、この悪ふざけときた! 赤いポーション
なんざ御伽噺の中だけで十分だつづーのつ! 分かつたら家に帰つて
普通のポーション持つてこい! 次に適当な赤い液体詰めて持つてき

たら本気で衛兵に突き出すからかくごしやがれっ!!これで教会に頭見てもらえばあああああか!!」

すごい剣幕で金貨一枚渡されて、裏口から放り出された。

何やねん。てか今陛下って言つた?そんなわけないか。兄弟子程度の人間が、あの素敵すぎるジルクニフ皇帝陛下に目をかけられるはずがない。あつたとしてもあれだ、他の奴が提案したのを、『(どうでも)いーよ』つて感じだから。勘違いすんな。

今日は散々だよ。ガラス瓶の在庫は無くなるし、クソ野郎に怒鳴られるし。最悪すぎる。死ね。でも金貨はよくやつた。

「くそがっ!!」

嫌がらせに2日は絶対匂いの取れないゴブリンの精○扉にぶつかけてやつた。

ザマアミサラセ!その匂いに苦しむが良い!!!

*

「あの女……」

俺様の名前はメイソン・テオ。帝国一の商会をパトロンに持つ、世界でも5本の指に入る薬師で、喧嘩も強けりや、顔もいいモテ男だ。

この国で俺より顔のいいやつは皇帝兵陛下見たことがない。流石は俺が唯一尊敬している他人である。ホモじやない。

俺は地面に散らばるガラス瓶の破片を集め袋に戻しタオルで床を丁寧に吹いた後、窓から放り投げた。

窓とドアに鍵がかかっているのを確認すると、懐から先ほど割らなかつた瓶を取り出した。

「…赤いが、匂いは普通のポーションより少し臭くない。効果が普通のポーションであれば、この液体の成分を何とか……」

あの女が本物を作れるわけはないが、まあまがい物レベルにはなつているだろう。

これを知り合いの鑑定士に分析させ研究すれば陛下の指定した納期に間に合うだろう。

間に合わせでもいい、そんな風に考えてしまうのは良くないことだと分かっているが、陛下からの莫大な支援金を前にしてはどんなに高潔な人間でも目がくらむ。

なにより、陛下の期待にこたえられねえなんて認めねえ。

「ふんっ」

何かあれば全部奴のせいにすればいい。
せいぜい俺様に利用される。